

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：34404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380631

研究課題名(和文)17-19世紀イギリスの簿記理論と会計実務における複式簿記の比較研究

研究課題名(英文)A Comparative of Bookkeeping Theory and Double Entry Bookkeeping in Accounting Practice of Britain in the 17-19th Centuries

研究代表者

杉田 武志 (Takeshi, SUGITA)

大阪経済大学・情報社会学部・教授

研究者番号：80509117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、代表者はイギリス東インド会社の会計実務を取り上げて17-18世紀前半における商品の輸出に関する会計処理について先行研究とは異なる、新たな知見を示すとともに18世紀半ばの報告書と本社の複式簿記との関係についても検討を行った。一連の研究成果の一部について論文等として公表した。

分担者は17-19世紀の簿記書等の検討から、単式簿記から複式簿記に発展したとする一般的な解釈に対して、歴史的にはその反対であることを論じた。特に単式簿記は、複式簿記の簡便法として18世紀に誕生し、決して複式簿記に先行して登場したのではないことを明らかにした。一連の研究成果について、論文などとして公表した。

研究成果の概要(英文)：This purpose is to conduct a comparative analysis of Bookkeeping Theory and Double Bookkeeping in Accounting Practice in British at 17th-19th Century. Sugita(Principal Investigator) considered the accounting practice, Watanabe(Co-Investigator) reviewed many bookkeeping texts. In particular, Sugita examined the accounting about export European Commodities of British East India Company from the second half of the 17th to the first half of the 18th century, and the relationship between Stock per Computation(1757, 1763) and the double entry bookkeeping of the headquarter at London. In this regard, it seems that Sugita could present new findings on accounting history of EIC.

Watanabe argued that against the general interpretation that it evolved from simple bookkeeping to double-entry bookkeeping, from historical bookkeeping from the 17th to 19th centuries, it was historically opposite. Watanabe published papers etc. as a series of research results, and reported at seminar.

研究分野：会計学

キーワード：東インド会社 複式簿記 株式会社 単式簿記 会計の生成 会計の役割 受託責任 信頼性

1 . 研究開始当初の背景

従来までの研究においても、17、18 世紀のイギリスで上梓された簿記書の分析は、幾人かの研究者によってなされてきたが、当時の帳簿組織がどのように発展してきたかに関する体系的な分析は、ほとんどなかったといっても過言ではない。会計実務史研究でも長期的な会計帳簿に関する研究もまたそれほど多くはないことから、同様のことが考えられた。

また、わが国の会計史研究は、従来、勘定生成史研究が中心で、帳簿組織の発展に関する研究は、ともすればなおざりにされる傾向があったと考えられた。そこで本研究では、幾分なおざりにされがちであったともいえる帳簿組織の発展を、主として、18 世紀末から 19 世紀初めにかけて登場してくる実務に適用できる実用的な簿記への改良の新しい動向を分析し、イギリスにおけるこのような動向が明治初期における我が国での複式簿記の導入期に与えたイギリス簿記書の影響をも考慮しながら、複式簿記の発展過程を主として簿記書と会計実践と比較しながら明らかにしていきたいと考えたのであった。ここに、会計史研究、特に簿記書研究における貢献が見いだされると考えられた。

2 . 研究の目的

上述したような問題意識のもと、本研究では、主に 17-19 世紀イギリスで出版された簿記書（理論）と当時の企業や商人たちが実際に記帳していた簿記法（実務）を比較検討することで、簿記理論が会計実務に与えた影響ならびに会計実務が簿記理論に与えた影響を明らかにすることを目的とした。

具体的には次の 3 点に焦点を当てていくこととした。（1）当時のイギリス簿記書の帳簿組織がどのように発展してきたかの分析、（2）同時期の簿記書でも紹介される、大規模株式会社のイギリス東インド会社から小規模な商人組織などの簿記法の特徴の考察、（3）東インド会社及び小規模な小売商たちの簿記実務とその記帳方法を解説した簿記書の比較検討を通じて、18 世紀イギリスで登場する新しい潮流、つまり実務に直接適用できる複式簿記の工夫・改善の動向（複式簿記の簡明化と詳細化の二つの潮流）の解明であった。これらを主な目的として研究を進めていった。

3 . 研究の方法

上記の目的を検討していくため、本研究では、以下のような手法で研究を進めた。研究代表者の杉田が会計実務、分担者の渡邊が簿記書を対象として関連史料などの検討を進めた。

杉田は会計実務として世界史に名を残す、

貿易商社のイギリス東インド会社を取り上げた。同社の史料については、大英図書館に所蔵される会計帳簿、会社議事録などの一次史料を当該図書館 HP からオンラインで複写注文して入手した。史料入手までの基礎作業として国内で探索可能な商人の会計帳簿や英国議会史料などの収集を行うとともに、17-19 世紀における簿記会計の意義に関する文献レビューも行った。

史料入手後は、17-19 世紀中葉までの簿記書と会計帳簿における特徴（簿記一巡の手続き、開始記入、帳簿の締切、損益計算、繰越記帳等）を整理して考察を進めた。

分担者の渡邊は、主に簿記書、先行研究等の考察、検討を進め、次のような見解を提示した。

複式簿記は、13 世紀初頭のイタリア北方のヴェネツィアやフィレンツェ等といった都市国家において、取引を記録する技法（アート）として誕生したというのが今日の一般的な解釈である。

では、そこで言う簿記とは、一体何を指しているのだろうか。どのようなシステムを簿記と呼んでいるのだろうか。この問いかけは、簿記の生成史を明らかにするうえで極めて重要な問題である。なぜなら、簿記の本質をどう定義するかによって、その生成の時期が異なってくるからである。簿記は、単式簿記と複式簿記の二つに分けられ、単式簿記から複式簿記へと進化していったとするのが一般的な解釈である。

しかし、史実は逆で、単式簿記は、18 世紀のイギリスで小規模な小売商のための複式簿記の簡便法として考案された。両者の生成史を分析するにあたっては、それぞれをどのように定義するかが重要になるため、簿記の本質をどこに求め、研究対象をどのように定義するかについて検討していった。

さらに、会計ならびにその利益計算構造を支えている複式簿記の第 1 義的な役割が意思決定に有用な情報の提供ではなく、客観的で検証可能な事実にもとづく信頼される情報の提供にあることを、一連の検討を通じて確認した。

この信頼性こそが会計にとって最も重要であり、複式簿記を誕生せしめた第 1 義的な要因であることを明らかにすると共に、単式簿記が複式簿記に先行して誕生した事実がないことも再度検証した。

4 . 研究成果

代表者の杉田は、会計実務の分析として、イギリス東インド会社の史料批判を実施してきた。特に、先行研究でもあまり着目されることのなかった、帳簿組織の分析を行い、当時の会計処理を浮き彫りにしていった。例えば、17 世紀後半から 18 世紀前半頃の輸出商品の会計処理について考察を行うことで、次のことを明らかとした。

主に、同社は本国から商品を海外商館地へと輸出する際には、イギリスから商品を船積みするわけだが、その際に、本社元帳の中では(輸出)商品勘定から航海勘定あるいは商館勘定などへと振替の記入が行われていたことがわかる。(輸出)商品勘定からの振替に伴い、17世紀ロンドン東インド会社の本社元帳では主に利益が上乘せされ、その結果、各商品勘定の締切時に算出される貸借差額は損益として表示されていた。

しかし、合同東インド会社の本社元帳では、各輸出商品勘定の締切時における貸借差額は主に Charges in India 勘定へと振替えられていたことが明らかとなった。なお、この貸借差額の振替先の変更の意味については今後の検討課題である。

さらに18世紀中葉頃の1757年、1763年の Stock per Computation と名付けられた財産有高報告書が本社会計帳簿の複式簿記の記録から誘導されたものであるかについて検討を行った。1757年のものに関しては、ワーキングペーパー(英文)として刊行した。

1763年の報告書と同時期の元帳の Stock 勘定や仕訳帳に記載された繰越のための記入などを考察した結果、この報告書は複式簿記に基づく帳簿の記録、とりわけ一定時点の勘定残高を誘導して作成されていないことが考えられた。

現在、この点についても査読誌へと投稿中である(掲載可否は未定、2017年6月現在)。一連の研究成果は、国内外の先行研究でもほとんど検討が行われていない点であり、同社会計の全容を明らかにする上で重要な意味を持つと考えられる。

分担者の渡邊は、簿記書や先行研究などの検討を通じて、単式簿記から複式簿記に発展したとする一般的な解釈に対して、歴史的にはその反対であること論じた。その点に関して、それは、単なる両者の定義の違いではないかとの解釈も可能であるため、それに応えると同時に、複式簿記を完成せしめた本来的な役割の分析を通して、昨今主張されてきた受託責任と信頼性との関係も明らかにした。

とりわけ、単式簿記は、複式簿記の簡便法として18世紀に誕生し、決して複式簿記に先行して登場したのではないことを明らかにした。しかし、まだ多くの人々は、現金収支簿記を単式簿記と見なし、現金収支簿記が複式簿記に先行して誕生していたと見なしているように思われた。この誤りを明らかにし、簿記、すなわち複式簿記の誕生が13世紀のイタリアであることを再確認していった。

なお、今後の課題としては、代表者と分担者の研究成果を踏まえて、簿記書と会計実務史料の考察結果を比較検討することで、両者間における複式簿記の伝播の過程を浮き彫りにするとともに、複式簿記の形式の変化と経済的、歴史的意義の変容を研究成果として国内外に向けて発信したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

(1) 渡邊泉, 「会計の生成史を論ずるに先立って」『會計』, 査読無, 第191巻第6号, 94-106頁, 2017年。

(2) 杉田武志, 「18世紀前半イギリス東インド会社における海外商館への商品輸出に伴う会計処理 Charges in India 勘定に関する検討」, 『大阪経大論集』, 査読無, 第67巻第1号, 35-57頁, 2016年。

(3) 杉田武志, "Statement of Financial Position of the British East India Company in the mid-18th century: "Stock per Computation" of 1757", *Osaka University of Economics Working Paper Series No. 2015-4*, 査読無, pp. 1-13, 2016年。

(4) 渡邊泉, 「会計の役割 - 受託責任(スチュワードシップ)と信頼性(リアイアビリティ)」『企業会計』, 査読無, Vol. 68 No. 10, 1309-1317頁, 2016年。

(5) 渡邊泉, 「複式簿記の発生以前に簿記は存在したか」, 『會計』, 査読無, 第190巻第1号, 94-106頁, 2016年。

(6) 渡邊泉, 「会計の役割 - 受託責任かそれとも情報提供か - 」『大阪経大論集』, 査読無, 第66巻第5号, 35-53頁, 2016年。

(7) 杉田武志, 「17世紀後半イギリス東インド会社における商品輸出の会計処理 - 商品輸出に伴う取得原価への利益の上乗せ - 」, 『産業経理』, 査読無, 第75巻第3号 152-163頁, 2015年。

(8) 渡邊泉, 「書評: ジェーン・グリーンソン - ホワイト著, 川添節子訳『バランスシートで読みとく世界経済史』」『会計・監査ジャーナル』, 査読無, 第27巻第3号, 114-115頁, 2015年。

[学会発表](計 3 件)

(1) 杉田武志, 「イギリス東インド会社における複式簿記と報告書 - 17世紀後半と18世紀中葉を対象として」, 日本簿記学会第32回関西西部会, (於): 桃山学院大学(大阪府和泉市), 2016年5月21日。

(2) 渡邊泉, 「歴史から見える会計の役割」, 第15回ヒューマン・スマート経営講演会(於)グランフロント大阪タワーC11F

(大阪府大阪市), 2016年11月24日。

(3) 渡邊泉「帳簿が語る歴史の真実 - 常識という名の嘘」会計学サマーセミナー in 九州 2015, (於): 佐賀大学本庄キャンパス (佐賀県佐賀市), 2015年8月20日。

〔図書〕(計 2 件)

(1) 渡邊泉『帳簿が語る歴史の真実 - 通説という名の誤り - 』同文館出版, 全 207 頁, 2016 年。

(2) 渡邊泉『新会計基礎論』, 森山書店, 260 頁 (1-31 頁), 2016 年。

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉田 武志 (Takeshi SUGITA)
大阪経済大学・情報社会学部・教授
研究者番号：80509117

(2) 研究分担者

渡邊 泉 (Izumi WATANABE)
大阪経済大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号：40066832